

# 遊漁者ニーズ対応型アユ種苗の利用研究

(予算区分 県単位 研究期間 平成 22～24 年度)

担当：富士養鱒場 鈴木勇己

## 【研究の背景とねらい】

静岡県には県内外から多くのアユ遊漁者が訪れ、中山間地域の経済活性化に貢献しています。しかし、来客数は近年減少傾向にあり、その原因の一つとして釣果の低迷が挙げられます。本研究では、遊漁者数の増加による中山間地域経済の活性化を目指し、興津川をモデル河川として、釣果向上に繋がる「人工系種苗の放流指針」を作成しました。

## 【研究成果】

- ・アユ遊漁者を対象にアンケート調査を実施し、遊漁者のニーズは良好な釣果にあること、興津川流域におけるアユ遊漁の経済波及効果は約 3 億円であることなどを明らかにしました。なお、波及効果の推定に用いたデータ (図 1) は、遊漁料や交通費を除いてあるため、他河川でもこれを利用し波及効果を推定することが可能です。
- ・DNA の塩基配列を指標に、95%以上の確率で人工系種苗と天然アユを判別する手法を確立しました。これにより、釣果に占める人工系種苗の割合の推定や、仔稚魚の由来判別が可能になりました。
- ・解禁当初 (5 月) における釣果の半分以上が人工系種苗であることを明らかにしました (図 2)。なお、他河川でも同様の傾向がみられ、人工系種苗の釣獲特性は県内全域で共通すると考えられました。また、放流された人工系種苗は 8 割が釣獲され、無駄なく利用されていることを明らかにしました。
- ・人工系種苗由来の仔稚魚はほとんど確認されなかったことから、本種苗の子孫が天然アユの遺伝的攪乱を引き起こす可能性は極めて低いと考えられました。
- ・人工系種苗の放流指針 (抜粋) : 解禁当初は人工系種苗が釣果の主体となることから、この時期の遊漁者ニーズを充足させるため、人工系種苗を解禁前に重点的に放流し、解禁当初の釣果に貢献させます。なお、早期 (解禁前) の放流は、人工系種苗が子孫を残すことによる、天然アユの遺伝的攪乱のリスク回避に繋がります。

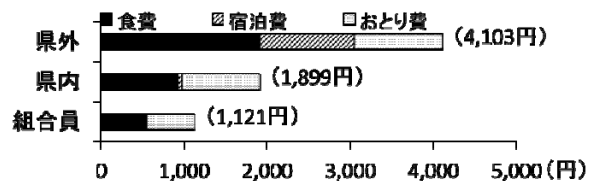


図 1 河川流域にもたらされる経済効果 (1 人 1 釣行あたりの経費)

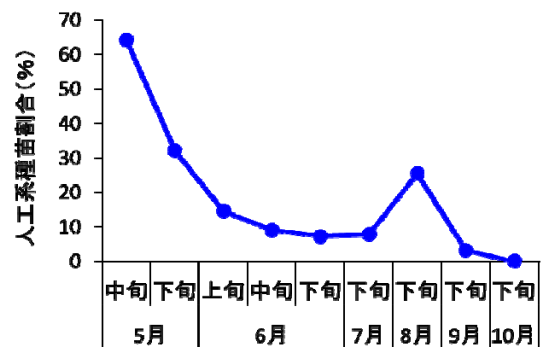


図 2 釣果に占める人工系種苗割合の推移

## 【研究成果の普及方法】

内水面漁協役員に対し、富士養鱒場が行う研修会や巡回指導などの普及活動を通して、人工系種苗の放流指針を基に各河川に適した放流方法の指導を行います。

(作成 平成 25 年 3 月)